

*
『明日香井集』下巻部類歌

はじめに

稿者は飛鳥井雅経の家集『明日香井集』を読み進める作業を行っている。雅経は嘉応二年（一一七〇）に生まれ、承久三年（一二二一）三月一日に五二歳で没した。父頼経が源義経に同心した罪科により文治五年（一一八九）に伊豆に配流された後、時期は不明であるが鎌倉へ下向し、建久八年（一一九七）二月に後鳥羽院の命により帰京した。正治二年（一二〇〇）に後鳥羽院歌壇に加えられ活躍するようになった。

『明日香井集』の構成を略記すると、上巻には定数歌を、百首歌・五十首歌・その他の定数歌の順に、さらにそれぞれの中で詠作順に収めている。下巻には前半に小規模な歌会・歌合歌を詠作順に配し、後半に、四季・恋・雑から成る部類歌を収めている。既に下巻前半部分までは読み終えたので、本稿では下巻後半部分について検討する。構成・詠作時期の判明する歌・贈答歌などについて整理を行いたい。和歌の内容および表現については稿を改めて検討する。

下巻後半部分は、歌番号二二九から一六七二までの三七四首で、四季・恋・雑に部類されて収められている。また、『明日香井集』に所収されていない雅経歌で本稿以前の拙稿で扱っていないものが、『源家長日記』に三首、『革刎要略集』裏書に一首存し、『源

**
稲葉美樹

家長日記』の三首中二首は贈答歌なので、相手の歌二首も含めた計六首も加えて検討する。この三八〇首中、贈答歌の他人詠は二五首で、これを除いた雅経歌三五五首のうち、題詠歌は二二一首、非題詠歌は一二四首である。下巻前半部分に見える歌会・歌合で主催者の判明するものほとんどは、後鳥羽院または順徳天皇主催で、そのほか源通親・源通光・九条道家ら主催のものも含まれている。それに対して、下巻後半部分の題詠歌は、彼らよりも身分的に劣る人物が催した私的な場での作なのであろう。恋の歌はすべて題詠歌である。題詠歌のうち、「春の歌の中に」などのような漠然とした詞書の歌は四〇首存する（注一）。また、非題詠歌の中にも、旅の歌に「あづまのみにてよみける歌のなかに」（一五四六～一五五三）、「これもおなじあづまの道にてよみ侍りける歌の中に」（一五五五～一五六八）という二組の歌群の計二三首が存する。

雅経歌三五五首のうち、勅撰集入集歌は一首である。すなわち、一三三四（『新古今集』一四五六）・一四四四（『続千載集』一四五三）・一四六九（『続古今集』一一八七）・一五四〇（『続古今集』八六六）・一六二六（『続拾遺集』七五七）・一六三六（『新後撰集』七二七）・一六四七（『続拾遺集』一三七〇）・一六五八（『新後撰集』六八九）・一六六〇（『続後撰集』五九九）・一六六五（『新勅撰集』五六四）・一六七二（『続古今集』一八七七）である。

また、『明日香井集』には重出歌が多く、本稿で扱う範囲にも一七首存するが、これについても稿を改めたい。

一 『明日香井集』下巻後半部分の構成

『明日香井集』下巻後半部分の三七四首の内訳は、春二八首（二九九～一三二六）・夏六首（一三二七～一三三三）・秋五八首（一三三三～一三九〇）・冬三八首（一三九一～一四二八）・恋五一首（一四二九～一四七九）・雑一八五首（一四八〇～一六六四）で、こゝまでは整然とした構成であるが、その後に増補ではないかと思われる八首が存する。これについては後述する。

雑の部は、さらに次のような小部立に細分することができる。旅九〇首（一四八〇～一五六九）・述懐三三首（一五七〇～一五九二）・哀傷三三首（一五九三～一六二五）・祝一四首（一六二六～一六三九）・神祇七首（一六四〇～一六四六）・釈教一五首（一六四七～一六六二）・隱題二首（一六六二・一六六三）・折句一首（一六六四）で、旅の歌が雑の部の約半数を占めているのみならず、全部立中で最多である。また、旅の歌のうちの過半数を占める一四八五～一五三七の五三首は、順徳天皇の命で東国へ下った際の歌で、以前稿者はこれを「東国下向歌群」と仮に名づけて検討したことがある（注二）。この歌群は、以下のような整然とした構成となっている。一四八五～一四九〇は出発前の歌、一四九一～一五三五は旅の途次の作が都から鎌倉への道順に沿って配されている。一五三六の詞書は「関東へくだりつきて、仙洞へ奏せさせ侍りける」、そして一五三七の順徳天皇の返歌でこの歌群は閉じられている。『明日香井集』にはこの旅がいつのものであるかを示す記述はないが、末尾の贈答は

順徳天皇の家集『紫禁集』にも見え（歌番号六一三・六一四）、それにより建保三年（一二二五）であることが判明する。順徳天皇の在位期間は承元四年（一二一〇）十一月から承久三年四月までなので、『明日香井集』の詞書には「仙洞」と退位後であるように記されているが在位中である。

各部立内の配列は、四季の部は概ね季節の推移に従い、また、歌語の共通性などにも注意が払われている。まれに逆行したり、配列基準が不明の場合もあるものの、総じて整然とした構成である。春の部を例にとると、立春の歌三首で始まり、余寒の歌一首が続く。次の二首は「海霞」題であるが、余寒の歌にも霞は詠みこまれている。次の「春の歌の中に」の詞書で収められている三首は、それぞれ「淡雪」「梅」「松」が詠まれており、次の「河辺柳」を含め、木を詠んだ歌三首が続く。帰雁の歌二首を挟んだ後、一四首から成る桜の歌群へ続く。桜歌群の末尾には、散る桜の歌二首、八重桜の歌二首、風で倒れた桜の歌一首が置かれている。次が「桃花浮水上」、末尾が「海辺暮春」という題の歌となっている。

恋の部の歌は、前述の通りすべて題詠である。忍恋の歌二首で始まるが、その後は、「夏恋」「旅恋」など外的条件が設定された題のグループ、「寄月恋」「寄源氏恋」など物に寄せる恋題のグループ、「思高人恋」「契経年恋」など恋の状況を設定した題のグループの順に配されている。

雑の部の配列方法は小部立によって異なる。いくつか取りあげてみたい。旅の歌は、前述の東国下向歌群の前後に題詠歌が五首ずつ配され、その後「旅歌の中に」という漠然とした詞書の歌三首、次に「あづまのみちにてよみける歌のなかに」という詞書の八首と「これもおなじあづまの道にてよみ侍りける歌の中に」という詞書

の一四首が、「熱田社にて」という詞書の一首を挟んで収められている。東国下向歌群の後の題詠歌五首は、一五四一を除いて題に季節が明記されている。一五四一の題は「旅泊月」で、前後の一五四〇は「夏旅を」一五四二は「旅山秋雁」という題であることから、和歌内容に季節性は読み取れないものの、一五四一は秋の歌と解してよからう。それに対して、東国下向歌群前の題詠歌には季節性がないうことから、二分割して収めたのではないかと思われる。また、「あづまのみにてよみける歌のなかに」の詞書の歌群の歌は、旅寝をはかないと歌つたり、都を思い出すと述べたり、自分を「さすらふる身」と表現したりするなど、消極的な、あるいは負の心情を詠む歌が集められている。また、旅の歌の末尾一五六九は「あづまへくだるとて、あをはかの宿にてあそびて侍りける傀儡、のぼるとてたづねければ、身まかりけるよし申すをききて」という詞書で、旅の歌とその次に配された述懐歌とをつなぐ役割を持つと考えられる。しかし、「これもおなじあづまの道にてよみ侍りける歌の中に」の詞書の歌群の歌には共通性が見いだせず、地名が詠み込まれた歌は都から東国への順に並べられているが、一五六三だけは逆行するなど、歌順の法則性も不明である。また、「熱田社にて」の詞書の歌も旅の途次での詠であるうが、なぜこの一首だけ前後の歌群の歌と別扱いなのか不思議に思われる。

配列方法が明確なのは、哀傷と祝の歌である。哀傷は、①寂蓮が死去した頃の藤原定家との贈答歌、②承元三年七月七日彦岐前司親重の泉に行った際に昔のことを思い出して詠んだ歌二首、③建暦二年（一二二二）七月六日筆筆の師であった季遠の追善供養に行った際の歌、④承久元年七月七日から九月二七日までの、一三歳の女子の病と死に関する歌群二八首から成る。①のみ年月が詞書に記され

ていないが、寂蓮は建仁二年（一二〇二）七月一三日から二〇日の間に没したことが知られているので、その後まもなくということになり、哀傷歌は詠作順に配されていることが知られる。筆筆の師であった季遠とは、安倍季遠であろう。京都方楽人安倍家の祖と言われる季政の男で、保延二年（一一三六）に生まれ、この歌が詠まれる前年の建暦元年九月二七日に七六歳で没している。哀傷歌の大半を占めるのが④である。詞書によると、この女子とは中将忠嗣室であるが、これについては後述する。

次の祝の歌は、定家との贈答七組から成る。なお、祝を一六三九までとしたが、一六四〇は「社頭祝君」という題で、祝と次の神祇の両方に部類することができ。前述の一五六九同様、二つの小部立のつながりの役割を果たしているであろう。祝の歌は、冒頭の建暦二年の豊の御禊の翌日の贈答以外は、雅経または定家本人あるいはそれぞれの子息にまつわる贈答である。すなわち、⑤定家の嫡男為家が加階した際の歌、⑥雅経の嫡男教雅を「ありきぞめ」に定家邸へ遣わした際の歌、⑦定家が三位に叙せられると同時に侍従に任じられた際の歌、⑧雅経が右兵衛督に任じられた際の歌、⑨定家が正三位に叙せられた際の歌、⑩教雅が少将に任じられた際の歌である。この六組はいずれも詞書に詠作年月は明記されていないが、祝われたできごとが生じたのは、⑤が建永元年（一二〇六）正月一日、⑦が建暦元年九月八日、⑧が建保四年三月二八日、⑨が建保四年二月一日で、この四組は哀傷歌と同じく詠作順に収められていることが知られる。とすると、⑥と⑩の教雅に関わる贈答も同様に詠作順に配されている可能性が高いのではないだろうか（注三）。ここで雅経の子女について整理しておくと、『尊卑分脈』により男子三名、女子二名がいたことが知られる。男子が⑥と⑩に見える教

雅のほか教定・教経、女子が④に見える中将忠嗣室のほか義景室である。嫡男教雅は、生年未詳、寛喜元年（一二三〇）三月一日没。正四位下左少将に至る。母は大江広元女。次男教定は、承元四年（文永三年（一二六六）四月八日、五七歳。正三位左兵衛督に至る。母は教雅と同じく大江広元女。教定男の雅有は、『明日香井集』撰者である。三男教経については詳細不明である。忠嗣室は、詞書に承久元年に一三歳で没したとあるので、逆算すると承元元年の生まれということになり次男教定は弟である。忠嗣という名の人物は多いが、雅経女の年齢から考えて、大炊御門師経（安元元年「一二七五」—正嘉三年「一二五九」男（左中将、正四位下）か、師経弟家宗男（中将）のいずれかであろうか。なお、『尊卑分脈』では忠継室となっており、年代的に可能性のある忠継という名の人物は二人見いだせるが、いずれも経歴が合わず該当しない。もう一人の女子の夫である義景は、安達義景である。景盛男で、従五位上秋田城介となる。承元四年に生まれ、建長五年（一二五三）に四四歳で没している。鎌倉幕府の有力御家人である。その妻である雅経女も鎌倉に住んだのであろうか。雅経は、一時期鎌倉に在住し、帰京後も後述するように何度か鎌倉へ下向している。また、妻は幕府の重臣大江広元女である。そのような鎌倉との関係の深さにより、女子の一人を御家人に嫁がせたのであろう。義景と雅経女との間には、顕盛・長景・時景の三人の男子がいる。うち、顕盛は寛元三年（一二四五）に生まれている。この時、義景は三六歳で、雅経女以外にも妻がおり、顕盛は『尊卑分脈』によれば六男である。このことから、おそらく雅経女は義景より若いと考えられ、義景と教定は同い年なので、雅経女は教定の妹と推定される。さて、生年未詳とした嫡男教雅であるが、前述のようにしも⑤⑩がすべて詠作順に配されて

いるとすると、出生時期はひとまず⑤と⑦の間と考えることができる。ただし、⑥に見える「ありきぞめ」（「行始」ともいう）が生後五〇日以内に行われ、⑤が建永元年正月一七日なので、上限は前年元久二年（一二〇五）十一月、また次男教定が承元四年に生まれており二人は同母なので下限は承元三年、この四年余りの間に生まれると考えられるのではないだろうか（注四）。すると、二二歳から二六歳の若さで没したことになる。また雅経は、鎌倉在住中に広元女と結婚したと考えられるので、結婚から長子誕生まで一〇年程度を経ていることになる。同様に考えると、⑩に見える教雅の少将任官は、建保四年（二月一日以降）雅経が没する承久三年（三月一日）までの四年余りの間と推定することができよう。すると、教雅八歳一七歳の間のこととなる。

なお、『源家長日記』には、⑤と同時期の二組の贈答歌が見える。一組は、定家が為家の加階を願ひ出ていることに關する定家と家長との贈答で、その後それが叶えられたと記されている。もう一組は、雅経が同年正月六日に従四位下に叙せられた際の、家長と雅経との贈答で（歌番号一四四・一四五）、これは『明日香井集』に見られない。

以上のように、部類歌が部分的には基準が不明確な箇所も見られるものの概ね規則正しく配列されていることを考えると、違和感を覚えるのが末尾の八首である。内訳は、一六六五が夏、一六六六・一六六九の四首が秋、一六七〇が冬、一六七一が雑、一六七二（『続古今集』一八七七）が「建保六年八月十三日中殿宴に、池月久明といへることを」という詞書を持つ歌である。一六七二については以前検討したことがあるが（注五）、『明日香井集』一二八四は、この会の時の作と詞書に記されている、別の歌である。歌会および『続

古今集』の本文により、一六七二が出詠歌と判明する。あくまでも推測であるが、一二八四は、何首か詠んだうち不採用とした作を、誤って入集させてしまったものではないかと考えられる。一六七二は、歌会歌が収載されていないことに気付いた何者かがここに置いたのではないだろうか。同様に他の七首も、家集に見いだせない歌を増補した可能性が高いように思われる。

二 詠作時期の判明する歌

本稿で扱う歌三八〇首は題詠の方が多く、その多くは歌題のみが記されていて詠作状況は不明である。雅経自身が主催した場合には詞書に「家会」と明記されているので、歌題しか記されていない歌は、他の誰かが催した場で詠まれたものと考えられる。しかし、詠作時期が知られる歌も一三四首（そのうち雅経歌は一一七首）見られるので、それらを整理し、雅経の和歌活動全体の中に位置づけてみたい。

下巻後半部分で詠作時期の判明する歌は、雅経三〇歳の正治元年から死去する前年の承久二年までの二二年にわたって詠まれたものである。以下、詠作順に詞書（『源家長日記』および『革劔要略集』裏書所載歌は、抜粋または詠歌状況の要約）と歌番号を示し、下巻後半部分以外から知られる雅経が参加した主な和歌行事等を*を付して示す。贈答歌の場合、相手の歌の番号も示し、雅経歌の番号に傍線を付す。

* 『鳥羽百首』 建久九年（一一九八）五月。私的な百首で、現在知られる雅経の最初の作品。現存するのは九三首。『明日

香井集』一〇九三。

ア 正治元年（一一九八）三月十七日 「正治元年三月十七日、大内南殿花御覧のために御幸ありける御ともに、右少弁範光さぶらひけるが、花枝につけて申しおくりける」（一三二・一三二二） 藤原範光は、刑部卿範兼の男。久寿二年（一一五五）—建暦三年四月五日、五九歳。従二位民部卿兼春宮権大夫。『正治初度百首』・『正治後度百首』両方の作者である。

* 『新宮歌合』 正治二年八月一日に行われた。出詠が確認できるのは、後鳥羽院と雅経のみ。催行日時が知られる中では、雅経が参加した最も早い和歌行事。『明日香井集』一〇二三—一〇二五。

イ 正治二年九月九日 二位殿（藤原重子）の出産を待ち遠しく思う後鳥羽院との贈答（『源家長日記』四・五）。

* 『正治後度百首』 正治二年一〇月以降一二月までの間に詠作。雅経が参加した最初の大規模な和歌行事。

* 『老若五十首歌合』 建仁元年（一一二〇）二月一六日・一八日。

* 『千五百番歌合』 同年六月に詠進か。

* 同年七月二七日和歌所寄人に、一一月三日『新古今集』撰者に任じられる。

ウ 建仁二年七月一三日—二〇日以後まもなく 「入道寂蓮身まかりて侍りしころ、定家朝臣のもとより」（二五九三・一五九四） 第一節の①参照。

エ 元久元年（一一二〇）五月二〇日 「元久元年五月廿日、院より御歌を春日社へまゐらせられける御使にまゐりて、その裏紙に御使の位署年号などかきつけて、そばにわたくしの歌

を一首かきそへ侍りける」(一六四二) 和歌は、『明日香井集』で唯一、万葉仮名で記されている。この時の後鳥羽院の歌と思われるものを『後鳥羽院御集』に見いだすことはできない。

オ 元久元年七月まで 『源家長日記』三八。後鳥羽院に長柄の

橋柱の木切れを献上した際の歌。これがいつのことであるかは未詳であるが、この木切れで作った文台が元久元年七月の歌会で使われているので、それ以前であることが知られる。

* 『新古今集』竟宴 元久二年三月二六日。

* 『元久詩歌合』 同年六月一五日。

* 『春日社百首』 同年一二月三日に宝前で披講した、私的な百首(注六)。和歌内容により、四位に叙せられることを願って詠んだ作と推測され、次の「カ」によりそれが叶えられたことが知られる。『明日香井集』五二八・六二八(末尾に長歌一首と反歌一首があるためか、一〇一首から成る)。

カ 建永元年(一二〇六) 正月六日以後まもなく 「少将雅経も、四位許されて、少将もとどまりたりしかば、申し遣はす。」

(『源家長日記』一四四・一四五)。雅経が四位に叙せられたのは、前述の通り建永元年正月六日で、同一三日には右少将から左少将に転じている。

キ 同年正月一七日以後まもなく 「治部卿定家子息為家元服してのち、ほどなく従上の加階したるよろこびに申しつかはし侍りける」(一六二八・一六二九) 第一節の⑤参照。

ク 同年正月・建暦元年九月? 「子息教雅をありきぞめに同人のもとへつかはしたりけるに、手本を引出物にして、そのつみ紙に」(一六三〇・一六三一) 第一節の⑥参照。

ケ 同年・承元四年の八月 「八月十日あまりのころ、兼季中将

信能少将などともなひて、鴨欄宜祐綱が河崎の泉へまかりて侍りければ、もとより人々のあそぶ景気のしければ、にげ帰りにて祐綱がもとへつかはしける」(一三六二・一三六三) 藤原兼季は親忠男。治承三年(一一七九) 生、没年は未詳であるが、寛元元年五月に出家している。藤原信能は、保能男。生年未詳―承久三年七月。兼季が中将であつたのが建永元年正月一三日・建保六年正月五日、信能が少将であつたのが元久二年四月二〇日・建暦元年正月一八日なので、この両方を満たす八月は建永元年・承元四年の五年間ということになる。祐綱は祐兼男。生没年等は未詳である。なお、祐兼は、後鳥羽院が鴨長明を河合社の欄宜に補任しようとした際にそれを妨げた人物である。

* 『最勝四天王院障子和歌』 承元元年(一二〇七) 六月頃詠進か。

コ 承元二年二月二三日 水無瀬殿の蹴鞠の会で二〇三〇回の鞠数を上げたことを後鳥羽院から知らされて奉った歌(『革芻要略集』裏書三五―三)(注七)。

サ 承元三年七月七日 「承元三年七月七日、六波羅の壱岐前司親重が泉へまかりて侍りしに、むかしこの所にてあそびし事などおもひいでられて、あはれに侍りしかば、障子上の小壁にかきつけける」(一五九五・一五九六) この壱岐前司親重は未詳。可能性が考えられるのは、藤原親有男か、源高重男であろうか。『新古今集』にも入集している勝命は俗名藤原親重であるが、天永三年(一一二二) 生まれなので、別人であろう。

シ 同年八月十五夜 「承元三年八月十五夜家会に」(一三四九・一三五五)

ス 承元四年三月ごろ 「承元四年三月ごろ、花山院のはなみにまかりて侍りけるに、をりふしあめふりて、催興し余亭主南庭のかたへいで、歌よみなどせられけるに」(一三二四) 花山院は藤原忠経。左大臣兼雅男。承安三年(一一七三)―寛喜元年八月五日、五七歳。正二位右大臣に至る。

セ 同年三月二〇日 「同月廿日、あまた人々ともなひて南殿の花見にまゐりたりけるに、土御門中納言定通、同中将通方朝臣など女房五六人あひぐして、さきよりまゐりて侍りけるが、中納言のもとより」(一三二五・一三二六・一三二七) 源定通は内大臣通親男。文治四年―宝治元年(一二四七)、六〇歳。正二位内大臣に至る。源通方も通親男。文治五年―暦仁元年(一二三八)、五〇歳。正二位大納言に至る。

ソ 同年一〇月 「承元四年新羅祭の次に、社頭残菊といふことをよみ侍りけるに」(一六四二) 『新羅社二首歌会』の作のうちの一首であるが、これについては既に述べたことがあるので、拙稿をご参照いただきたい(注八)。

タ 建暦元年(一一二一)―承久二年の五月五日 「五月五日、本院へまゐりて、女房越前をたづねて対面して、ややひさしくありていけるに、忠信卿春宮権亮の扇をとりて硯をめしてたびたれば、かきつけ侍る」(一六四四・一六四五) 「本院」とあることから、土御門院が退位した承元四年一月以降であることが知られ、五月五日なので翌建暦元年以降、雅経が没するのが承久三年三月一日なのでその前年の五月五日までということになる。越前は、大中公親女。始め後鳥

羽院の生母七条院殖子に仕え、その後後鳥羽院皇女の嘉陽門院に仕えた。生没年未詳。忠信は坊門信清男、源実朝の御台所の兄。文治三年生、没年未詳。ただし、両者とも雅経よりも没年は遅い。「春宮権亮」が誰をさすのか未詳であるが、元久元年三月六日に任じられた藤原頼平(頼実男)、建保六年一月二六日に任じられた源通平(通光男)、翌承久元年一月一三日に任じられた藤原高実(良平男)の三人が考えられる。ただし、「扇をとりて」という表現から、忠信より七歳年長の頼平よりも、他の二人のうちのいずれかの可能性が高いように思われる。通平であれば承久元年のこととなり通平は一七歳、高実であれば承久二年のこととなり高実は一〇歳である。

チ 同年九月 「同人三位に叙して、一たびに侍従をかけたたりけるにつかはしける」(一六三二・一六三三) 定家との贈答。第一節の⑦参照。

ツ 建暦二年 「建暦二年のころよみ侍りける歌の中に」(一二九九・一三〇一) 春部冒頭「湖上立春」題の三首。

テ 同 「建暦二年の家会に、沢蚩火を」(一三三二)

* 『内裏詩歌合』 同年五月一日。確認できるとで最初の、雅経が参加した順徳天皇主催の和歌行事。

ト 同年七月六日 「建暦二年七月六日、筆筆の師にて侍りける季遠がために、追善しける所へまかりむかひて、ふけてかへるとて心のうちにおもひつけ侍りける」(二五九七) 第一節の③参照。

ナ 同年一〇月二九日 「建暦二年、とよのみそぎふたたびとげおこなはれしつぎのひ、治部卿定家のもとへ申しおくり侍り

ける」(一六二六・一六二七) 豊の御禊が再び行われたとは、前年の御禊直後に順徳天皇の准母春華門院が崩御したために大嘗会が延期され、建暦二年一〇月二八日に再度行われたことを言う。

ニ 建保元年(一二二三) 「建保元年のころ、霞中余寒と云ふことを」(一二〇二)

* 『内裏歌合』 同年八月七日・九月二三日・閏九月一九日。

又 建保二年三月二〇日頃 「建保二年三月廿日比、やへざくらの枝に鞠をつけて内裏へまゐらせけるに、そへて侍りける」(一三三二・一三三三) 順徳天皇との贈答。

* 『百日歌合』 同年七月二五日詠作開始。『明日香井集』六二九・七二七。歌合と記されているが、他者の出詠は確認できず、私的な百首(現存するのは九九首)と考えられる。述懐歌が四割強を占めていることなどにより、「ハ」に見える「述懐百首」がこれを指すのではないかと考察したことがある(注九)。

* 『内裏秋十五首歌合』 同年八月一六日。

ネ 建保三年正月一四日 「建保三年正月十四日、賀茂社へまうでけるに、月はくまなくて雪うちちりければ」(二六四三)

* 『院四十五番歌合』 同年六月二日。

ノ 同年九月・十月 第一節で記した東国下向歌群。歌群は「御つかひにかまくらへくだるよし、高弁上人のもとへ申しつかはし侍りけるついでに」(二四八五)で始まるが、この贈答は相手の家集『明恵上人歌集』にも見られる(歌番号七三・七四)。いずれの家集でもこの贈答の日付は記されないが、『明日香井集』の次の贈答「九月廿九日、侍従宰相定家卿のもと

へ申しおくりける」の直前と考えられる。また、「御つかひ」は、歌群末尾の贈答により、順徳天皇の使いであったと知られる。一四九〇の詞書は「十月一日、賀茂社へまゐらせける三首に、太田新社」で、この後ほどなく都を発ったのである。次に日付が記されるのは、歌群末尾、鎌倉到着後の雅経歌への順徳天皇の返歌(一五三七)の詞書「宸筆の御返歌、十月廿七日たまはりて侍りける」である。

* 『建保四年院百首』 二月頃までに詠進したか。

ハ 同年三月 「近衛司にてとしたけぬるよし、述懐百首におほくよみて、ほどなく右兵衛督になりて侍りしあしたに、同人のもとより」(二六三四・一六三五) 定家との贈答。第一節の⑧参照。

* 『内裏百番歌合』 同年閏六月九日。

ヒ 同年一〇月 「建保四年十月歌合し侍りけるに、初冬」(二三九一) 歌合とあるが、この時の歌は他に見いだせない。

フ 同年二月一四日 「同人、祖父中納言の春日行幸の賞をつのりて、正三位したる朝につかはしける」(一六三六・一六三七) 定家との贈答。第一節の⑨参照。

ヘ 同年二月一四日以降か 「教雅、少将になりて侍りし時、同人のもとよりよろこびつかはすとて」(一六三八・一六三九) 定家との贈答。第一節の⑩参照。

* 『右大臣家歌合』 建保五年九月。九条道家主催。

ホ 建保六年八月一三日 「建保六年八月十三日中殿宴に、池月久明といへることを」(一六七二)

* 『道助法親王家五十首』 建保六年頃下命、承久二年までに詠進か。

マ

承久元年七月七日・九月二七日 第一節の④に示した、女子の病と死に関する歌群である。「承久元年六月の比より、女中將忠嗣朝臣室歳十三わづらふ事ありけるに、七月七日かぢの葉にかきつけける」(二五九八)という詞書の一首からこの歌群は始まる。次に「九日、つひにかくれ侍りにければ、その比あまたの歌よみける中に」として二〇首が並び、「八月廿七日、この仏事の捧物に唐綾をもちてかめをつくりて、前栽の花をりてたてて、一首をむすびつけける」(一六一九)、「九月十五夜、亡者の小手箱を布施にしけるに、なかによみて入れける」(一六二〇)、「廿一日、おびぬぎ侍るとて」(一六二一)、「廿七日、中將忠嗣朝臣の造紙箱をおくりつかはすとて、敷のうらに書きつけける」という詞書の忠嗣の歌二首と雅経の返歌二首(一六二二・一六二五)でこの歌群は終わる。

ミ

承久二年七月一七日 「承久二年七月十七日影供三首に、古径萩を」(一三四二)・「承久二年七月十七日影供三首に、暁初雁を」(一三七五)・「承久二年七月十七日影供三首に、寄萩恋を」(一四四六) この歌会の他の歌人の作は知られない。

*

『春日社歌合』 承久三年三月七日。雅経が没する四日前に行われた。順徳天皇主催。『明日香井集』一二九四・一二九六。

以上のア・ミが、本稿で扱う中で、詠歌時期の知られる歌のすべてである。雅経が後鳥羽院歌壇での活動を開始するのは正治二年であるが、その前年の作も、わずか一首ではあるが見られる。また、後鳥羽院との現存する唯一の贈答歌が正治二年という早い時期のものである上、院の妃の出産に関する歌であり、既に院と雅経とが近

しい関係にあったと想像されて興味深い。院との関わりで詠まれた歌はこのほか「エ」・「オ」・「コ」にも見られる。建暦二年からは順徳天皇歌壇の活動が開始され、雅経も中心的な存在ではないながらも参加しているが、それと対応するように順徳天皇との贈答歌も見られるようになる(「ヌ」・「ノ」)。また、『春日社百首』と「カ」、『百日歌合』と「ハ」のように、合わせ読むことにより、詠歌状況をより明確に理解できる例もある。その後、雅経が没する承久三年三月の約半年前まで、ほぼ毎年の詠作を確認することができる。

三 贈答歌

前節までと重複する歌も多いが、次に贈答歌を整理したい。『源家長日記』に見られる二組を含め、二三組の贈答歌を見いだすことができる。このうち、贈答の相手が不明なのは二組で、雅経歌はいずれも代作である。最も多くの贈答歌が残っている相手は定家で、九組存する。順徳天皇と藤原清範の二組がこれに続き、後鳥羽院・藤原範光・源定通と源具親・鴨祐綱・明恵・忠嗣(二首ずつ)・坊門忠信・源家長が各一組である。以下、この順に見て行きたい。

A 藤原定家

第一節に記した寂蓮が没した際の贈答(①)と、祝の七組、および東国下向歌群冒頭の明恵との贈答に続く贈答歌(第二節の「ノ」)の計九組である。このうちの八組は定家の家集『拾遺愚草』にも収められているが、東国下向歌群中の一組のみ見られない。

B 順徳天皇

第二節「ヌ」と「ノ」の末尾の歌で、いずれも『紫禁集』にも見

える（歌番号三三六・三三七と六一三・六一四）。

C 藤原清範

「なくべきころよりもとく郭公をききて、清範がもとへそのよし申しつかはしたる返事に」（一三三八）とそれへの雅経の返歌（一三二九）、および「嵯峨の卿二品の第へ御幸なりて、しばらく御所にてありけるに、清範が御ともにさぶらひけるに、小袖つかはすとて」（一三九九）と清範の返歌（一四〇〇）の二組が見られる。清範は、範光男。従五位上内蔵頭に至る。嵯峨の卿二品（藤原兼子）第へ御幸があった際の歌は『明日香井集』にもう一首見られる。建保四年の詠で、『後鳥羽院御集』に同じ時の院の作が収められている（歌番号一七四二）。

嵯峨卿二品の第へ御幸ありて、庚申に当座御会侍りけるに

同年十月十一日

山家落葉

やどちかきやまはあらしのふく度に

このはおともなほしぐれつつ（一二六二）

武藤康史氏は「年月無記ながら」[1399—1400]もあるいはこのときの作か（詞書より推定）（注一〇）とされる。

D 後鳥羽院

第二節「イ」参照。

E 藤原範光

第二節「ア」参照。

F 源定通・源具親

第二節「セ」に示した定通歌と雅経の返歌、および、誘ってもらえなかったと思われる具親の歌の三首で一連の作である。具親は、師光男。生没年未詳。従四位下左少将に至る。宮内卿の兄。

G 鴨祐綱

第二節「ケ」参照。

H 明恵

第二節「ノ」参照。

I 忠嗣

第一節④および第二節「マ」参照。

J 坊門忠信

第二節「タ」参照。

K 源家長

第二節「カ」参照。

このほか、相手が不明な二組は以下のとおりである。「つくりたるうそをあまた木の枝にすゑて、人のもとへつかはすとて、人にかはりて」（二五八九）とその返歌（二五九〇）、および「びはを人につかはすとて、又ひとにかはる」（二五九二）とその返歌（二五九二）で、いずれも物を人に贈る際の歌で代作であるが、他の歌集に見いだせず、誰の代作であるのかも誰に贈ったのかも不明である。なお、この二組を、第一節では雑の部の小部立中の述懐に含めた。歌数が少ないために便宜上行ったことであるが、述懐歌とは言い難く、雑の中の雑とでも言うべきか。

以上の二三組、相手の歌を含め四七首の贈答歌から、雅経の日常生活や交流関係の一端を知ることができよう。特に定家とは、贈答の回数も多く、子息の「ありきぞめ」の行き先に定家宅を選んでいるなど、密接な交流があったことが知られる。後鳥羽院との贈答歌は『明日香井集』には見られず、また藤原秀能など、雅経と親しかった人物はこのほかにもおり、散逸した贈答歌も少なからずあるので

はないかと思われる。

四 その他

ここまでに示したほかに、詠作時期等は不明であるものの、状況にある程度知ることのできる作が見られるので整理したい。

i 「九月十三夜にすずかの関にとまりてよめる」(一二六六)

雅経は、確認できるだけで四度東国へ下向している。最初は、前述のように文治五年に父頼経が伊豆に流された後に下向、建久八年二月に帰京した。二度目は建仁元年二月～三月、三度目は建暦元年九月二五日以降出立、一〇月二二日までに帰京、四度目は東国下向歌群が詠まれた建保三年である。この四度の中で、九月十三夜に鈴鹿にいたと考えて矛盾しないのは最初に鎌倉へ下った際のみであるが、現在知られる雅経の詠歌は最も早いもので建久九年であること、自分の将来を思い描けない中での旅で和歌を詠むような気分にはならなかったのではないかと想像されることなどを考えると、この旅以外の機会に詠まれた可能性の方が高いと考えられる。この四度のほかにも雅経は東国へ下っていてその旅で詠まれたのではないだろうか。

ii 「雪のうちに法勝寺へまゐりてよめる」(一四一六) 法勝寺は現在の京都市左京区にあった寺。白河院の御願寺。

iii 「あづまへくだるとて、あをはかの宿にてあそびて侍りける傀儡、のぼるとてたづねければ、身まかりけるよし申すをききて」(一五六九)

iv 「貴布欄社にまうでたりしに、奥御前にて菴室のありけるに

立入りてみければ、深山の景気余興つきがたくおぼえて、障子にかきつけける」(一六四六)

v 「法印慶範が房に舍利供養し侍りける次に、人々歌よみてつかはし侍りけるに、紅葉を」(一六六一) 慶範という名の人物は『国書人名辞典』(岩波書店)に三人見られるが、そのうち、天台宗の僧で、久寿二年(一一五五)に生まれ、承久三年十一月一日六七歳で没した、民部卿平親範男の慶範が該当すると思われる。

また、雅経自身が歌会・歌合を催していたことが次の例から知られる。

vi 「家会に、月前花を」(一二一九)

vii 「建暦二年の家会に、沢螢火を」(一二三二)

viii 「承元三年八月十五夜家会に」 浦辺月(一二四九)・河上月

(一二五〇)・深山月(一二五一)・関路月(一二五二)・田家月(一二五三)・竹中月(一二五四)・閑庭月(一二五五)の七首がこの時のものと思われる。

ix 「家会に、毎夜明月」(一二六四) 次の歌も「月照亡屋」という「月」を含む四字題なので、同じ時の作である可能性も考えられるか。

x 「家会に、月前談往事」(一二六七)

xi 「建保四年十月歌合し侍りけるに、初冬」(一二九一)

以上の六例を数えることができる。いずれも他の歌集には見られず(一二九一は『明日香井集』内で重出している)、詞書から得られる以上の情報のあるものはない。また、他の歌人で参加が確認できる

人もない。

まとめ

以上、『明日香井集』下巻後半部分および『源家長日記』・『革菊要略集』裏書に見える雅経歌等三八〇首について、いくつかの点から整理を行った。その結果、この部分は四季・恋・雑に部類されているが、雑はさらに細分されており、それぞれの部立内の和歌の配列にも一定の規則性があつて、概ね整然とした構成となっていることが知られた。それをもとに嫡男教雅の生年等の推定をも試みた。

詠作時期が判明する歌も一三四首見られ、雅経が鎌倉から帰京した約一年後から、没する約半年前まで、ほぼ毎年の作が存する。二三組の贈答歌も、藤原清範との二組と相手不明の二組を除いて詠作時期が知られ、計一二人との交流を知ることができる。また、雅経自身が歌会・歌合を行ったことも詞書により確認できる。

下巻後半部分において大きな比重を占めているのは、東国下向歌群五三首と、女子の病と死に関わる歌群二八首で、雅経にとつて旅と、当然ではあるが我が子は重要な意味を持っていたと考えられる。我が子を思う気持ちは、定家とのそれぞれの子息に関わる計三組の贈答歌からも窺えよう。東国下向歌群が詠まれたのは任務による旅においてであつたが、現在知られる中の三度目の東国下向は、鴨長明を伴つてのものでおそらく私的な旅であつたと考えられ、また、女子の一人を幕府の御家人に嫁がせており、雅経にとつて東国とのかかわりは、終生公私において大きな意味をもっていたと推測される。

本稿では和歌の内容に触れることはあまりできなかった。重出歌

の問題とともに、稿を改めて考えたい。

注

一 引用は、和歌は本文・歌番号とも『新編国歌大観』により、『源家長日記』の和歌以外の部分は『中世日記紀行文学全評釈集成』第三卷（勉誠出版、二〇〇四年、『源家長日記』は藤田一尊氏執筆）による。

二 『明日香井集』「東国下向歌群」（仮称）考（『日本文芸思潮史論叢』大野順一先生古希記念論文集刊行会編、二〇〇一年）。

三 この贈答はすべて『拾遺愚草』にも収められている。間に詠作時期不明の四首と、逆順となる藤原家隆との贈答歌一組も含むが、雅経との贈答歌はすべて、『明日香井集』と同じ歌順である。

四 教雅の出生について、久曾神昇氏は『崇徳天皇御本古今和歌集』（文明社、一九四〇年、四六ページ）において、「長男教雅の出生は不明であるが、『ありきぞめ』をしたのが建永元年正月乃至建暦元年九月であること（『明日香井集』拾遺愚草）、又教雅が少将になったのは建保六年乃至承久二年の三年程の間であり、その時父雅経の任少将の年齢三十二歳、弟教定の任少将の二十六歳より考へて、二十歳位にはなつてゐたらうと思はれるので、仮に承久元年二十一歳とすれば正治元年出生となるのであり、」と述べられている。また、義景室と教定に関する記述もある。

五 「建永元年から承久三年の飛鳥井雅経詠―参加歌会・歌合の整理」（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第四十集、

二〇〇九年）。

六 拙稿「飛鳥井雅経の『春日社百首』詠」（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第三六集、二〇〇五年）参照。

七 『革劔要略集』裏書は、渡辺融氏・桑山浩然氏『蹴鞠の研究 公家鞠の成立』（一九九四年、東京大学出版会）による。

八 注五に同じ。

九 「飛鳥井雅経の『百日歌合』詠」（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第三七集、二〇〇六年）。

一〇 「藤原雅経年譜」（『三田国文』第二号、一九八四年三月）。

* Classified wakas of “Asukasi syū” the second volume
** Miki Inaba (Japanese Language and Literature)

キーワード 飛鳥井雅経 『明日香井集』 部類歌 四季 恋 雑